

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 25 日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720100

研究課題名(和文) 近世における風土記の学問・受容の多角的研究

研究課題名(英文) The research of acceptance of Fudoki in the Edo period

研究代表者

兼岡 理恵 (KANEOKA, RIE)

千葉大学・文学部・准教授

研究者番号：70453735

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果として、近世に本格的に始まった風土記研究について、播磨・出雲、それぞれの地域における写本伝播や研究活動の具体像を明らかにしたことがある。この研究成果を大学講義や市民講座において発表、活用するツールとしてGoogle Earthを活用した風土記デジタル地図を開発した。以上の業績が認められ、若手研究者を対象とする平成25年千葉大学先進科学賞を受賞した。さらにこれらの成果を『風土記の世界観(仮称)』として吉川弘文館より刊行予定である。

研究成果の概要(英文)：As a result of this research, I showed the overview of the spread of manuscript of Fudoki, and a concrete of Fudoki research with a focus on Harima, and Izumo in the Edo period. And in order to make this research known, and to deliver a lecture in university and public courses, I have developed a Fudoki digital map that utilize Google Earth as a tool to take advantage. Observed these works, I was awarded the exploratory and advanced in 2013 to target young researchers who have studied Chiba advanced science prize. In addition these results will be published as a "The World view of Fudoki(tentative name)" from Yoshikawa Kobunkan.

研究分野：古代文学

キーワード：風土記 地誌 受容

1. 研究開始当初の背景

奈良時代に編纂された風土記にとって近世とは、写本探索・伝播がなされた「風土記再発見の時代」(秋本吉郎『風土記の研究』ミネルヴァ書房 1963) また初めて本格的な注釈が生まれた時代であった。そして近年、この点に注目した成果が次々に上がってきている。江戸中期の国学者・荷田春満の風土記注釈について考察した青木周平「荷田春満の風土記研究 自筆稿本『出雲風土記考』を中心に」(『風土記研究』第29号 2004・9)、同「解題『出雲風土記春満考』(自筆稿本)と『出雲風土記考』(成稿本)」(『新編荷田春満全集第三巻』おうふう 2005)、当時の国学者による『出雲国風土記』研究と、近世地誌の記述に基づいた現地調査に基づく関和彦『出雲国風土記』註論(明石書店 2006)、近世の『常陸国風土記』注釈史を考察した橋本雅之『古風土記の研究』第2部第4章(和泉書院 2007)、近世末期の国学者・鈴木重胤や敷田年治の風土記研究を検証した荊木美行『風土記研究の諸問題』(国書刊行会 2009)など。また本研究の申請者・兼岡も研究分担者となった基盤研究(C)「近世における風土記受容の総合的研究」(課題番号20520186 研究代表者:橋本雅之)研究報告会(第8回風土記研究会と共催 2010・9・11)では、契沖、伴信友、鹿持雅澄の風土記受容(それぞれ報告者は兼岡、橋本雅之、奥田俊博)、さらに葛西太一「谷川土清の風土記利用と方法」(同上風土記研究会における口頭発表)など、近世国学者を中心とした、風土記に関する研究の蓄積が行われてきている。

しかしその一方、これらの論考は単なる個別の事例研究に留まっている。そもそも文献の受容・注釈とは、先学の学問をいかに継承(あるいは批判)するかという営みである。風土記がいかに受容され、また、その注釈が学問的深化を遂げてきたのかを見通すためには、学問的系譜や人的ネットワーク、すなわち風土記受容の「場」を具体的に解明することが不可欠なのである。

こうした視点を重視した申請者は、『風土記受容史研究』(笠間書院 2008)において中世歌学や近世国学における風土記受容の系譜を明らかにした。同書は風土記研究の新たな方向性を提示した画期的な成果として学会から高い評価を受け、第26回上代文学会賞を受賞した。申請者はこの方法論によって、いわば「点」でしかなかった近世国学者の個別研究を貫く「糸」を紡ぎ出せると確信している。

また近世期における風土記受容の特徴として、地方を描いた文献「風土記」に対する、地方知識人の関心がある。地方知識人の知の諸相に関しては、横田冬彦編『知識と学問をになう人びと』(吉川弘文館 2007)、若尾政希・菊池勇雄編『覚醒する地域意識』(吉川弘文館 2010)など歴史学の分野では活況を

呈しているが、具体的な風土記伝播に関してはさらなる研究を要する。さらに近世は、官撰・私撰地誌、名所記が多数作成され、人々に享受された時代でもある。

官撰地誌については、白井哲哉『日本近世地誌編纂史研究』(思文閣出版 2004)があるが、風土記研究との関連、また私撰地誌・名所記における風土記受容に関しては、ほとんど研究が進んでいない現状である。

2. 研究の目的

上記のような研究背景をふまえ、本研究の目的は、奈良時代に編纂された風土記が、近世において具体的にどのような「場」で学ばれ、受容されていったのかを多角的な視点から検証し、風土記の学問や受容の全貌を明らかにすること、そして「風土記」とはなにか」という根源的な問いを追究することである。具体的なテーマは以下の3点である。

- (1) 風土記をめぐる学問の系譜、人的ネットワークの解明
- (2) 地方における風土記研究・伝播の具体的な解明
- (3) 近世地誌・名所記における風土記受容

3. 研究の方法

本研究は、各地の文庫・図書館・資料館等に所蔵される風土記関連の写本・版本・古文書等の調査という文献学的調査と、風土記関連地の実地踏査を、主たる方法とする。その成果を下記のような形でまとめ、論文化する。

- (1) 各国学者の学問的系譜をふまえた風土記写本系統リストの作成
- (2) 各国学者の著作等から、五風土記を中心とした注釈・引用・風土記に関する言説をまとめた「風土記注釈集成」「風土記引用集成」「風土記言説集成」の作成
- (3) 風土記研究史年表の作成

4. 研究成果

第一の成果として、近世に端を発する風土記研究の概要、また各地方における風土記研究の具体相を明らかにしたことがある。「風土記をいかに研究するか 本文研究・研究史の視座から」(『上代文学』112号、2014年)は、その前年に行われた上代文学会秋季シンポジウム「風土記研究の可能性を拓く」(於:お茶の水女子大学、2013年)における発表を元にしたもので、近世期の『播磨国風土記』『出雲国風土記』研究の諸相を説くとともに、今後の風土記研究の方法論を提案した論考である。

上記シンポジウムをはじめ、2013年は、和銅6年(713)の風土記撰進官命より1300年ということで、各地でシンポジウム・学会等が開催され、兼岡も『常陸国風土記』と『出雲国風土記』(島根県古代文化センター主催「出雲国風土記シンポジウム 古代出雲の実像」於:日経ホール 2014年7月)「常

陸国風土記の魅力」(島根県古代文化センター主催「風土記 1300 年記念風土記フェスタ公開シンポジウム 風土記研究の最前線」於：松江テルサ 2013 年 10 月)、「出雲大社と神々のものがたり」(平成の大遷宮出雲大社展シンポジウム「出雲大社と神々のものがたり」於：大社文化プレイスうらら館 2013 年 6 月)などでパネラーを務めた。これらのシンポジウムは、学界はじめ広く一般市民に、最新の風土記研究の成果を伝える絶好の機会となった。

また、近世における風土記研究に寄与した人物に関する論考も、成果の一つである。「今井似閑の人物像 - 堀景山『不尽言』の一挿話を中心に - 」(『語文論叢』第 29 号、2014 年)では、風土記逸文採集の端緒を拓いた人物、今井似閑について、従来、文学史的には低い評価を受けてきた似閑だが、京都の豪商という身分から数多くの写本・版本を所有するとともに、広範囲に亘る知的ネットワークを有しており、それらを生かして師匠である契沖の古典研究に多大なる貢献をしたこと、また契沖を含む当時の知的ネットワークの紐帯的役割を果たした人物として、再評価した。

さらに契沖に関して、大阪府立中之島図書館や円珠庵所蔵の写本調査によって、その著作『雑記』の写本作成、伝播状況について考察し、その成果を鈴屋学会で発表(2013 年 4 月)論文化した(「契沖『雑記』をめぐって 円珠庵本・写本伝播を中心に」、『鈴屋学会報』第 30 号、2014 年)。

一方、研究成果を大学講義や市民講座において広く公開、活用するツールとして、Google Earth を使用した風土記デジタル地図を、千葉大学アカデミック・リンク・センター共同研究部門と協同開発し、その成果を「風土記」の授業におけるデジタル地図教材の開発」(日本デジタル教科書学会 2014 年度年次大会、於：新潟大学教育学部附属新潟小学校 2014 年 8 月)として発表した。本教材に関しては、第 6 回教育 IT ソリューション EXPO (於：東京ビックサイト 2015 年 5 月)において発表予定である。

以上のような業績が認められ、萌芽的かつ先進的な研究を行う若手研究者に与えられる平成 25 年千葉大学先進科学賞を受賞、さらに、これらの成果をもとに『風土記の世界観(仮称)』として吉川弘文館より刊行予定である。

今後の課題として、近世における風土記注釈史の検討、その成果の刊行がある。具体的には内山真龍『出雲風土記解』の写本調査、翻刻、刊行がある。また本研究において作成を進めてきた注釈・引用・風土記に関する言説をまとめた「風土記注釈集成」「風土記引用集成」「風土記言説集成」風土記研究史年表の出版準備を進める。

さらに近世に続く近代における風土記研究について、その具体相を明らかにするとともに、近代日本における郷土意識の形成過程

との関連を検討することがある。その一例として、『播磨国風土記新考』の編纂者で、播磨出身者である井上通泰、および井上の弟である柳田國男、松岡静雄の風土記研究の検討から、明治～大正期の知識層における郷土意識を探究する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8 件)

兼岡理恵、「風土記の「視点」 中央と地方のはざま」、『語学・文学』212 号、(査読無・依頼) pp.74-84、2015 年

兼岡理恵、「今井似閑の人物像 - 堀景山『不尽言』の一挿話を中心に - 」、『語文論叢』第 29 号、(査読無・依頼) pp.1-7、2014 年

兼岡理恵「風土記をいかに「研究」するか 本文研究、研究史の視座から」、『上代文学』第 112 号、(査読無・依頼) pp.29-44、2014 年

兼岡理恵「契沖『雑記』をめぐって 円珠庵本・写本伝播を中心に」、『鈴屋学会報』第 30 号、(査読有) pp.61-74、2014 年

兼岡理恵「気象に寄せる関心 古代の「雪」」、『日本文学』第 62 巻第 5 号、(査読無・依頼) pp.2 - 9、2013 年

兼岡理恵「風土記歌謡から見えるもの 『播磨国風土記』逸文・「速鳥」歌を中心に」、『国語と国文学』第 90 巻第 5 号、(査読無・依頼) pp.125 - 135、2013 年

兼岡理恵「駒澤大学図書館所蔵『松島風土記』」、『人文研究』第 41 号、(査読有) pp.177 203、2012 年

兼岡理恵「『常陸国風土記』 近世地誌・縁起からみる『常陸国風土記』」、『国文学 解釈と鑑賞』第 76 巻 5 号、(査読無・依頼) pp.159-166、2011 年

〔学会発表〕(計 6 件)

兼岡理恵、「『常陸国風土記』と『出雲国風土記』」島根県古代文化センター主催「出雲国風土記シンポジウム 古代出雲の実像」2014 年 7 月 21 日、日経ホール(東京都・千代田区)

栃木博子、能登谷泰見、小野永貴、岡本一志、兼岡理恵、長丁光則、「風土記」の授業におけるデジタル地図教材の開発」日本デジタル教科書学会 2014 年度年次大会、2014 年 8 月 17 日、新潟大学教育学部附属新潟小学校(新潟県・新潟市)

兼岡理恵「風土記をいかに「研究」するか - 本文研究、研究史の視座から - 」、平成 25 年度上代文学会秋季シンポジウム「風土記研究の未来を拓く」、2013 年 11 月 16 日、お茶の水女子大学（東京都・文京区）

兼岡理恵「常陸国風土記の魅力」、島根県古代文化センター主催「風土記 1300 年記念風土記フェスタ公開シンポジウム 風土記研究の最前線」、2013 年 10 月 27 日、松江テルサ テルサホール（島根県・松江市）

兼岡理恵「出雲大社と神々のものがたり」、平成の大遷宮出雲大社展シンポジウム「出雲大社と神々のものがたり」、2013 年 6 月 2 日、大社文化プレイスうらら館 だんだんホール（島根県・出雲市）

兼岡理恵「契沖『円珠庵雑記』をめぐって 円珠庵本・写本伝播を中心に」、第 30 回鈴屋学会、2013 年 4 月 21 日、本居宣長記念館（三重県・松阪市）

〔図書〕(計 4 件)

兼岡理恵、鈴木健一他、三弥井書店、『天空の文学史 太陽・月・星』、367 頁 (pp.11 - 25)、2014 年

兼岡理恵、多田一臣他、筑摩書房、『万葉語誌』、430 頁(150 項目中、16 項目を執筆)、2014 年

兼岡理恵、山下久夫他、森話社、『越境する古事記伝』、346 頁 (pp.205 - 236) 2012 年

兼岡理恵、鈴木健一他、三弥井書店、『鳥獣虫魚の文学史 鳥の巻』、366 頁 (pp.7-23)、2011 年

〔その他〕

特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

兼岡 理恵 (KANEOKA, Rie)

千葉大学・文学部・准教授

研究者番号：7 0 4 5 3 7 3 5